

荷川取崎名原の古墓

荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群

－ 大和建設新工社建設工事に伴う発掘調査報告書 －

2017（平成 29 年）

宮古島市教育委員会

序

本報告書は、大米建設新工社建設工事に伴う、荷川取崎名原の古墓と荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群の発掘調査成果をまとめた報告書です。

荷川取崎名原の古墓は、本工事に伴い新規に発見された近世～近代にかけての古墓です。古墓は、自然の岩陰を利用したもので、墓の内部からは14体という多くの埋葬者が確認されました。また、人骨に伴って、沖縄産の焼物の他にタイ産の褐釉陶器も副葬されていました。本遺跡の周辺では、過去に複数の古墓が発見された経緯などもあり、近世～近代にかけての墓域であったことが考えられます。

荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群は、旧日本陸軍が構築した特攻艇秘匿壕の1つです。今回の調査では、2基の壕を対象とし、過去の調査成果や、壕の形態、戦史資料などからその成果をまとめております。特攻艇秘匿壕を対象とした戦争遺跡の調査事例は、まだ少ない状況にありますが、今回の調査事例も含め、同地域の沖縄戦時の状況を考える一つの契機になればと思います。

末尾になりましたが、今回の調査及び報告書作成にあたり、ご指導、ご協力を賜りました関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成29(2017)年12月

宮古島市教育委員会 教育長 宮國 博

例 言

1. 本報告書は、大米建設新工社建設工事に伴う荷川取崎名原の古墓及び、荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群の記録・保存調査の成果をまとめた報告書である。
2. 本工事に伴い新規に発見された荷川取崎名原の古墓は、所在地の小字名を冠して遺跡名とした。また、荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群は、『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅴ）- 宮古諸島編 -』（沖縄県立埋蔵文化財センター 2005）で報告されている遺跡名を用いた。
3. 荷川取崎名原の古墓の発掘調査は、平成 29 年 4 月 24 日から 4 月 26 日までの期間で実施した。
荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群の発掘調査については、壕内の崩落の危険性が高かったことから、壕口周辺部の清掃と 2 次堆積層の除去と、小規模な試掘調査にとどめ、測量調査を実施した。
4. 荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群の発掘調査については、各壕に既存の壕番号が付されていなかったため、本報告書内では『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅴ）- 宮古諸島編 -』（沖縄県立埋蔵文化財センター 2005）の報告におけるⅡの地点の壕 1、壕 2 として報告を行う。
5. 発掘調査は、宮古島市教育委員会が直営して行った。
発掘調査は、設備設計メンテックへ発掘調査支援業務の委託契約を締結し実施した。
また、荷川取崎名原の古墓の発掘調査で出土した人骨の分析業務については、株式会社文化財サービス沖縄営業所と委託契約を締結し実施した。
6. 荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群の発掘調査では、壕口周辺内における土砂の除去について、株式会社大米建設にご協力頂いた。記して感謝申し上げます。
7. 本報告書内における ref. は国立公文書館アジア歴史資料センターのレファレンス番号を示すものである。
8. 本報告書は、久貝弥嗣が中心となり、菱木勇一ほかの協力を得て編集を行った。報告書の執筆は、以下のとおりである。
第 2 章 第 2 節 歴史的環境：山口直美、久貝弥嗣（文責：久貝弥嗣）
第 3 章 第 3 節 人骨分析：株式会社文化財サービス。その他は、久貝弥嗣が執筆した。
9. 発掘調査で得られた遺物、実測図、写真等の資料は、宮古島市教育委員会にて保管している。

目 次

序

例言

第1章 経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	4
第3章 報告① - 荷川取崎名原の古墓 -	11
第1節 遺構	11
第2節 遺物	12
第3節 人骨分析（株式会社文化財サービス）	19
第4章 報告② - 荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群	28
第1節 壕1	28
第2節 壕2	29

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	3	第 7 図	荷川取崎名原の古墓平面図 (S=1/40)	11
第 2 図	開発予定地内における調査位置図	4	第 8 図	荷川取崎名原古墓被葬者の構成	22
第 3 図	旧地形図における遺跡位置図	5	第 9 図	壕 1 出土遺物・鏃 (S=2/5)	28
第 4 図	周辺遺跡	6	第 10 図	壕 1・壕 2 平面図及び断面図 (S=1/200)	
第 5 図	Ⅱ地点における特攻艇秘匿壕位置図	9		壕 1 土層断面図 (S=1/100)	29
第 6 図	Ⅱ地点における特攻艇秘匿壕位置図 (拡大)	9	第 11 図	壕 1・壕 2 における特攻艇配置推定図 (S=1/200)	30

図 版 目 次

図版 1	航空写真にみる調査位置図	4	図版 6	出土遺物 4	18
図版 2	陸軍水上特攻艇① (岡本 1997 より)	8	図版 7	厨子甕内検出頭骨	23
図版 3	出土遺物 1 (S ≒ 1/5)	15	図版 8	厨子甕内検出頭骨	24
図版 4	出土遺物 2 (S ≒ 1/4)	16	図版 9	壕 1 出土遺物・鏃 (S ≒ 2/5)	28
図版 5	出土遺物 3	17			

表 目 次

第 1 表	出土遺物集計表	13
第 2 表	観察表	14
第 3 表	荷川取崎名原古墓 (一括) 部位別集計表 / 推定被葬者数	20
第 4 表	荷川取崎名原古墓 (厨子甕内) 部位別集計表 / 推定被葬者数	21
第 5 表	荷川取崎名原古墓推定被葬者数	22

写 真 目 次

写真 1	古墓発掘作業風景	2	写真 15	発掘作業風景	26
写真 2	人骨洗浄作業風景	2	写真 16	完掘状況 (全景)	27
写真 3	特攻艇秘匿壕発掘作業風景	2	写真 17	完掘状況 (墓内部)	27
写真 4	文化財資料室	2	写真 18	大浜の特攻艇秘匿壕・壕②の内部	31
写真 5	1997 年調査時の壕内部①	9	写真 19	着手前	32
写真 6	1997 年調査時の壕内部②	9	写真 20	壕 1 着手前	32
写真 7	I 地点・駐屯地碑	10	写真 21	壕 2 着手前	33
写真 8	I 地点・壕 5 内部	10	写真 22	調査終了後における近景	33
写真 9	Ⅲ地点壕・近景	10	写真 23	壕 1・調査終了後の壕内部分	34
写真 10	Ⅲ地点・銃眼	10	写真 24	壕 1・調査終了後の壕内部	34
写真 11	Ⅲ地点・壕近景	10	写真 25	壕 1・柱跡と試掘調査状況	35
写真 12	着手前 (全景)	25	写真 26	壕 2・調査終了後の壕内部分	35
写真 13	着手前 (墓内部)	25	写真 27	壕 2・壕内部分 (壕内付近)	36
写真 14	着手前 (墓内部)	26	写真 28	壕 2・壕内部	36

第1章 経 過

第1節 調査に至る経緯

荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕及び荷川取崎名原の古墓の発掘調査は、株式会社大米建設宮古本店新築工事に伴う、記録保存調査である。荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群は、周知の埋蔵文化財（戦争遺跡）であるが、荷川取崎名原の古墓は、新規に発見された岩陰墓である。

平成28年2月26日に、株式会社大米建設より、宮古本店新築工事の範囲となる宮古島市平良字荷川取崎名原344番3を含む34筆について文化財等の有無の確認について宮古島市教育委員会へ照会が行われた。これらを受けて、宮古島市教育委員会では、照会地内での踏査を行い、周知の埋蔵文化財（戦争遺跡）である荷川取岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕の内の2つの壕と、1基の古墓を確認した。現地にて2基の壕と、古墓1基の工事内における取り扱いについて協議を行った。新規に発見された古墓について、文化財保護法第96条第1項に基づく届け出が平成29年3月29日付で株式会社大米建設より宮古島市教育委員会へ沖縄県教育委員会への進達依頼が行われた。これを受けて、宮古島市教育委員会は、平成29年4月6日付宮教生第37号にて沖縄県教育委員会へ進達を行った。この届出に対して、平成29年4月14日付教文第59号にて、沖縄県教育委員会より株式会社大米建設へ土木工事等については、埋蔵文化財へ影響が及ぶため、工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知があり、宮古島市教育委員会が、平成29年4月20日付宮教生第160号にて、株式会社大米建設へ伝達を行った。この新規に発見された古墓は、その小字名を冠して、荷川取崎名原の古墓とした。

荷川取岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群については、平成29年3月30日付で株式会社大米建設より文化財保護法第93条第1項に基づき沖縄県教育委員会へ届出が行われ、宮古島市教育委員会へ進達依頼された。宮古島市教育委員会は、平成29年4月4日付宮教生第25号にて沖縄県教育委員会へ進達した。これに対し、沖縄県教育委員会からは、平成29年4月14日付教文第59号にて、土木工事等の工事着手前に発掘調査を実施する必要がある旨の回答が株式会社大米建設へ通知され、宮古島市教育委員会が平成29年4月20日付宮教生第160号にて、株式会社大米建設工事へ伝達した。

これらの文化財保護法に基づく手続きが行われた後に、株式会社大米建設と宮古島市教育委員会との間で発掘調査に関する協議が行われ、平成29年4月21日に、宮古島市教育委員会教育長宮國博と、株式会社大米建設代表取締役社長仲本靖彦との間で、荷川取崎名原の古墓及び荷川取岸秘匿壕群ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群発掘調査業務委託の契約が締結された。履行期間は、平成29年4月24日から平成29年12月25日までとされ、発掘作業、資料整理、報告書作成までを一括して行うこととした。

発掘調査は、宮古島市教育委員会が主体となり、発掘作業に関する支援業務について設備設計メンテナンスと委託契約を締結し（平成29年4月21日締結、履行期間は平成29年4月24日～5月12日）、出土人骨の分析については株式会社文化財サービス沖縄営業所と委託契約を締結し（平成29年8月18日締結、履行期間は平成29年8月21日～10月31日）、報告書作成については、シモジ印刷と委託契約を締結（平成29年12月13日締結、履行期間は平成29年12月14日～12月21日）して実施した。

第2節 調査体制

本調査を行った平成29年度の調査体制は以下のとおりである。

事業主体 宮古島市教育委員会 教育長 宮國 博

事業所管 生涯学習部 部長 川満 広紀

事業総括 生涯学習部次長兼生涯学習振興課長 久貝 喜一

生涯学習振興課課長補佐兼文化財係長 砂辺 和正

事業事務 生涯学習振興課 文化財係 主 事 久貝 春陽

調査担当 生涯学習振興課 文化財係 主任主事 久貝 弥嗣

調査補助 生涯学習振興課 文化財係 嘱 託 川満 広紀

臨時職員 菱木 勇一、山口 直美、森谷大介

文化財資料室資料整理作業員

草浦昌子、幸地ちはる、下地久美子、砂川幸子、高橋美智代、西里咲子

山里智子

荷川取崎名原の古墓発掘調査支援業務 設備設計メンテック

荷川取崎名原の古墓出土人骨分析委託業 株式会社文化財サービス

発掘調査報告書編集印刷委託業務 シモジ印刷



写真1 古墓発掘作業風景（メンテック）



写真2 人骨洗浄作業風景（株式会社文化財サービス）



写真3 特攻艇秘匿壕発掘作業風景（メンテック）



写真4 文化財資料室

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

今回発掘調査を行った荷川取崎名原の古墓及び、荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群は、宮古島市平良字荷川取崎名原 587-1（古墓）、594-1（特攻艇秘匿壕群）番地に位置する（図版1）。荷川取は、平良市街地を構成する5カ字（荷川取、西仲宗根、東仲宗根、西里、下里）の中で、北東側一帯に位置する。2つの遺跡の位置する海岸線沿いでは広い範囲で埋め立て工事が行われ、南側には荷川取漁港、北側には大型クルーズ船が寄港する下崎埠頭が設けられるなど、宮古島市内における一大港湾拠点地を形成している。2つの遺跡は、海岸線沿いの石灰岩小丘陵地に立地しており、調査地前は原野であった。また、それ以前は、その周辺部も含めゴルフ場（宮古シーサイドゴルフ）としても利用されていた。

前述したように現在は、海岸線が埋め立てられ、新しい道路も設けられているため、旧地形を伺いすることはできない。しかし、昭和56(1981)年の測量図（第3図）では、特攻艇秘匿壕は、砂丘を有する小規模な湾へ隣接していたことがみてとれる。また、古墓についても周辺地では最も標高の高い（標高15.7m）場所の周辺部に形成されていたことがみれとれる。このような古墓は、過去の道路建設工事時にも複数確認されており、石灰岩の岩陰を利用した古墓が複数点在する墓域であったと考えられる。

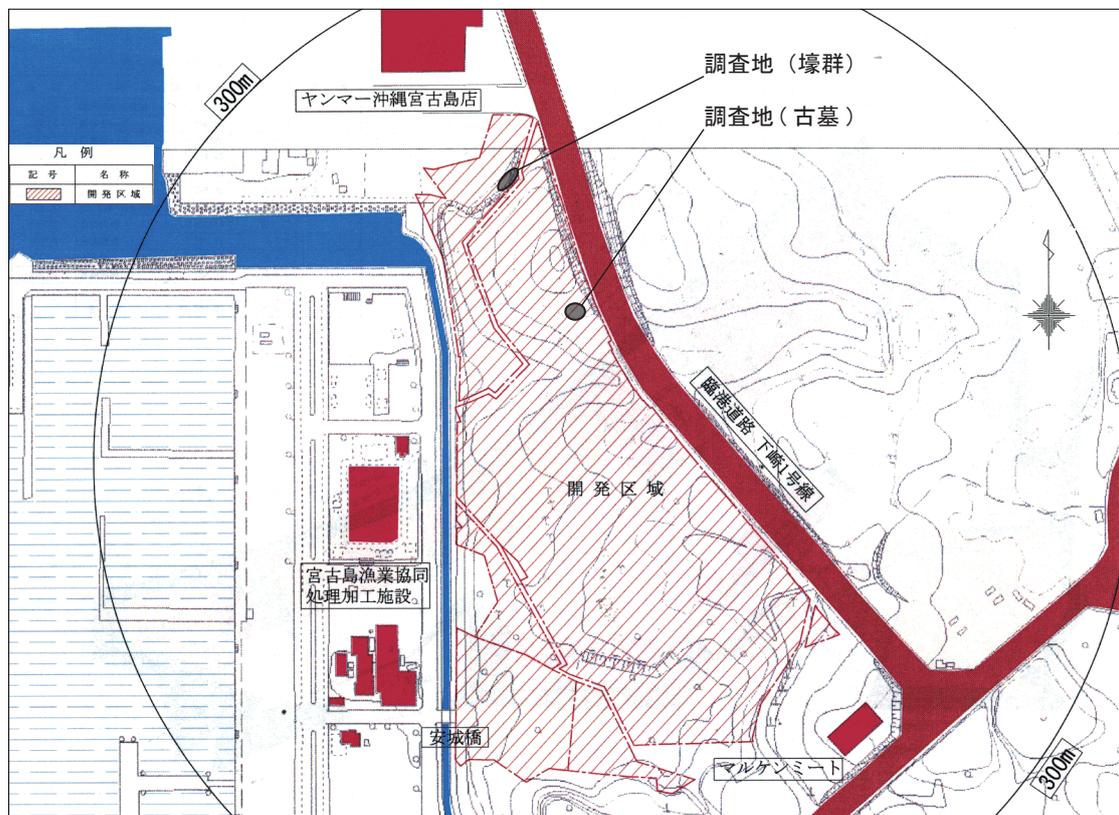
昭和56年の測量図（第3図）では、荷川取の海岸線に砂丘地が点在していることがみてとれる。このような地理的環境は、今回の調査地も含め、荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群が構築された立地を考える上で重要な要素であったといえる。



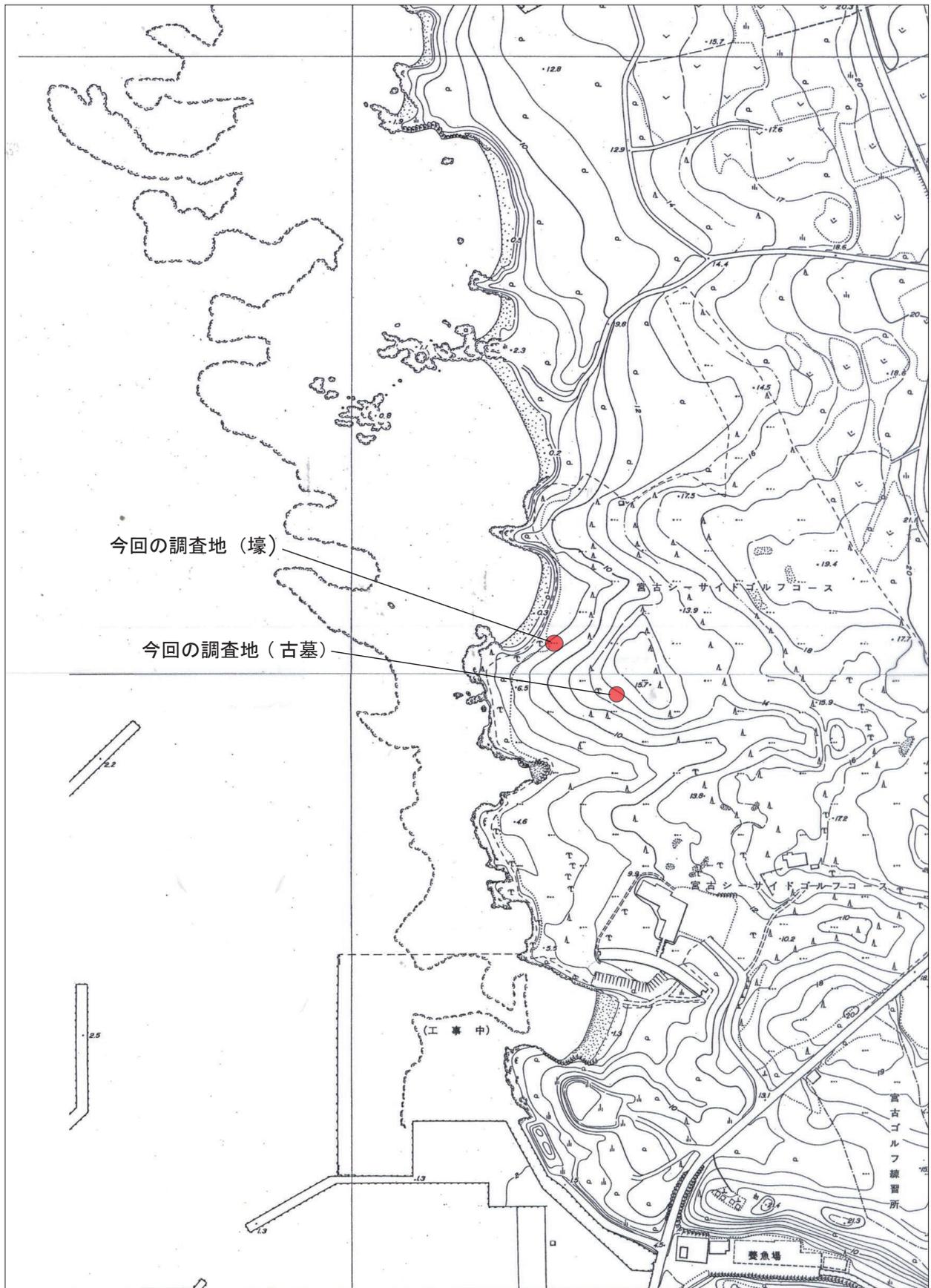
第1図 遺跡位置図



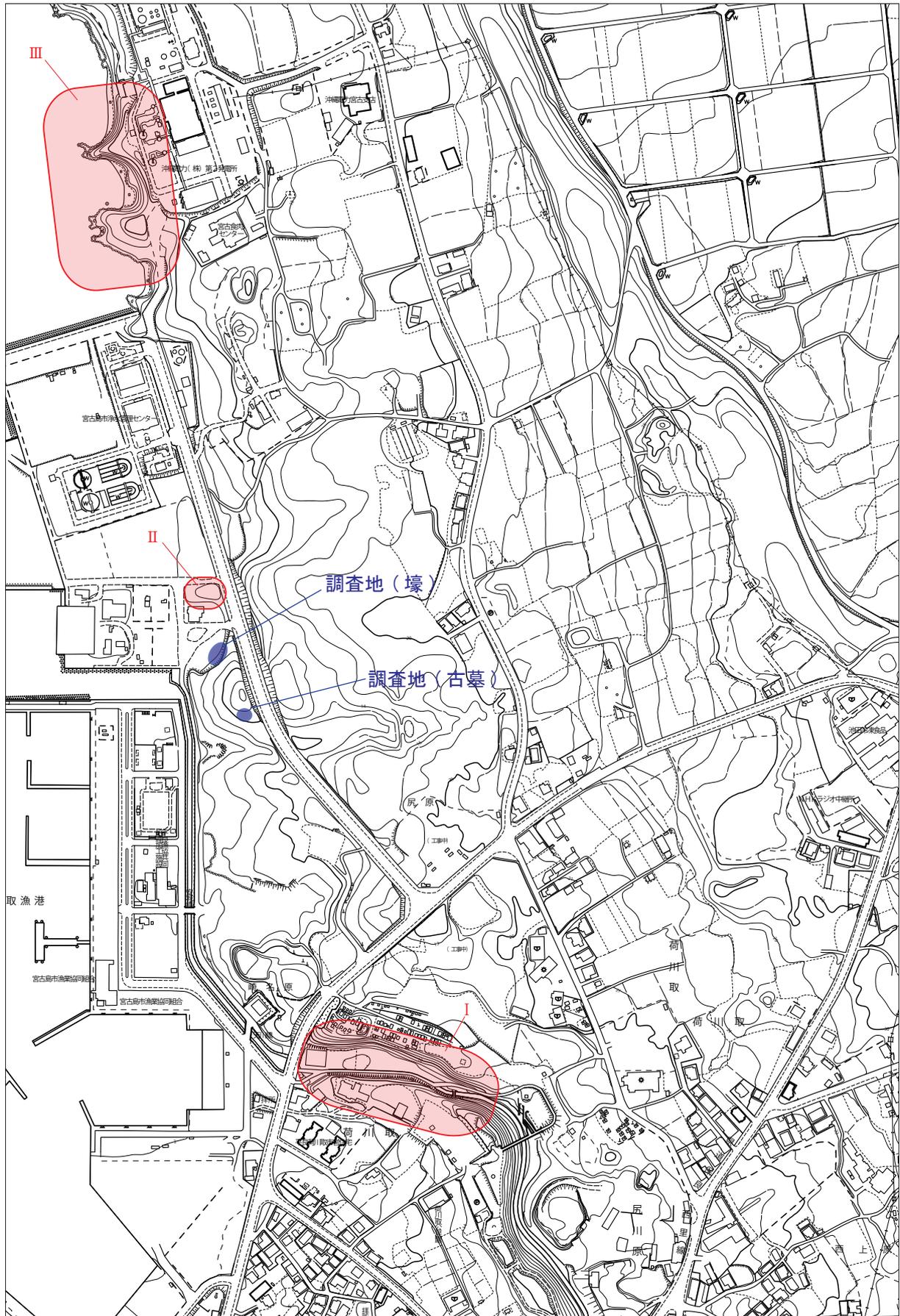
図版1 航空写真にみる調査位置図 (宮古島市市内 GIS より航空写真を利用)



第2図 開発予定地内における調査位置図



第3図 旧地形図における遺跡位置図 (昭和56年測量沖縄県作成平良都市計画図に図示。S=1/1,250)



第4図 周辺遺跡（薄い赤で塗られた範囲が、荷川取海岸秘匿壕群・ウプドゥマーリヤ特攻秘匿壕群の範囲）

第2節 歴史的環境 - 荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群 -

現在、宮古島市内では、旧日本陸軍の特攻艇秘匿壕として本遺跡の他に、「大浜の特攻艇秘匿壕群」、「トゥリバー浜の特攻艇秘匿壕群」の3つが確認されており、旧日本海軍の特攻艇秘匿壕として「狩俣ヌーザランミの特攻艇秘匿壕」が1つ確認されている。旧日本陸軍が構築した3つの特攻艇秘匿壕は、いずれも現在の平良港の周辺部に分布している。

今回調査を行った荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群は、海上挺身基地第4大隊によって構築され、海上挺身第4戦隊が配備されている。

海上挺身基地第4大隊は、暁第16791部隊と通称される。昭和19年8月31日に編成され、9月5日に博多港を出帆し、9月7日に宮古島に上陸している。同部隊については、隊員であった西江重樹による『宮古に甦る』にその詳細をみてとることができる。以下、同資料より部隊の概要について記す。

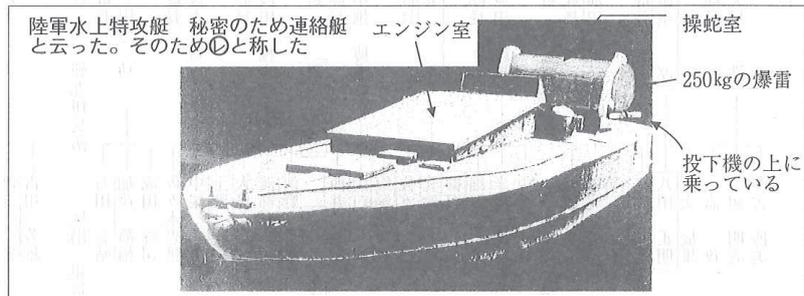
海上挺身基地第4大隊は、西江重樹大尉を大隊長とし、本部の他に第1～3中隊で編成される。本部は、69名で構成され、第2、第3中隊の構成人数は不明であるが、第1中隊は232名で構成されていることから、同様の規模であったことが推察される。また、第1中隊232名の構成を詳細にみていくと、指揮班22名、第1小隊65名、第2小隊65名、第3小隊80名に細分されている。第2中隊は、今井好房大尉を中隊長とし、平良港の北端から東方に延びる峡谷で秘匿艇壕の構築を行っている。峡谷の谷間は、両側から高さ十数メートルにおよぶ岩壁があつて、その岩壁に舟艇を格納するための幅3m、奥行10mの洞窟30カ所を10m間隔に掘削する計画をたてている。第3中隊は、山本昇大尉を中隊長として、第2中隊の北側で作業を行っている。第1中隊は、関沢静風大尉を中隊長とし、第3中隊と同様に第2中隊の北側の海岸線にそつて掩体壕の構築を行っている。

海上挺身第4戦隊は、暁第16780部隊と通称され、金子昌功少佐を隊長とする。昭和19年8月中旬より豊島基地にて陸軍水上特攻艇①の訓練に入り、9月13日広島県厳島で正式に編成されている。その後9月28日に門司港を出帆、同日付で第32軍に編入となっている。12月2日には鹿児島港を出帆し、12月14日に慶良間諸島の座間味島に上陸している。以後、同島の阿佐海岸で舟艇整備と訓練を実施。昭和20年1月7日に座間味島から機帆船8隻に舟艇を分載し、まず本部と第2、第3中隊が先発となって任務地である宮古島へ出帆している。しかし、折からの台風を避け久米島へ寄港し、1月11日に久米島を出帆している。そんな中で、第3中隊所属の船が爆発事故により火災を起こし、船は沈没。近接して渡航していた機帆船は渡航能力を失い多良間島へ漂着している。また、他の船も4日間漂流の後に、台湾北部へ漂着している。後発組となった第1中隊は、1月18日に久米島を出帆し、1月21日に宮古島へ上陸している。結局、2月に至って任務地である宮古島へ終結したのは78名であった。その後は、特攻艇秘匿壕群内に舟艇を収容し訓練を行っている。なお、本部隊は、昭和20年1月22日の空襲によって15名が戦死した他、終戦時まで23名が亡くなっている。

沖縄県立埋蔵文化財センターによる分布調査の報告書（沖縄県立埋蔵文化財センター2005）では、本遺跡は、大きくⅠ～Ⅲの3つの地点に分かれて壕が構築されている状況が報告されている。

今回調査の対象となった壕が位置するのは、Ⅱの地点である。Ⅱの地点には、今回調査を行った2つの壕の他に、壕推定地として道路建設に伴い記録保存調査が行われた壕跡地が記載されている（第5・6図）。この壕跡地については、臨港道路下崎Ⅰ号線に伴い1997年4月9日から10日にかけて壕の記録保存のための測量調査が行われている。これらの壕は、当該遺跡の一部であり、今回調査を行った壕とも

関連性が高いことから、これらの壕の位置や形態及び測量調査時の写真の掲載を行った。壕は、全体で5つの壕口から構成される。北側に4つの壕口がまとまっており、南側に1つの壕口を有している。いずれも内部で連結しており、非常に大規模な壕であったことが分



図版 2 陸軍水上特攻艇㊦（岡本 1997 より）

かる。今回調査を行った2基の壕は、この壕の南側に位置し、一連の特攻艇秘匿壕群であることがみてとれる。

Iの地点は、荷川取漁港東側の谷部から荷川取海岸にかけて16カ所の特攻艇秘匿壕群が確認されている。IIIの地点が、現在の沖縄電力第2発電所に面した海岸線沿いに秘匿壕群が8カ所構築されており、中には銃眼を有する壕も構築されている。

本遺跡の周辺部には、前述したように他の部隊による特攻艇秘匿壕群も構築されている。大浜の特攻艇秘匿壕群は、海上挺身基地第30大隊によって構築されている。現在の伊良部大橋へ至る宮古島側の丘陵下部に秘匿壕群が構築されている。本遺跡の特徴は、2つの壕口をコの字形に連結して構築する点である。本特攻艇秘匿壕群には、海上挺進第30戦隊が配備される予定であったが、奄美近海で全滅されたため、使用されずに終戦をむかえている。トゥリバー浜特攻艇秘匿壕群も、海上挺身基地第30大隊によって構築されている。本秘匿壕群は、海に面する海岸線の崖面を掘り込んで構築しており、全体で19カ所が確認されている。本秘匿壕群は、Iの字形に直線的な壕を並列して構築する特徴がみてとれる。これらの状況から、各特攻艇秘匿壕群の形態には、それぞれの異なる特徴をみてとることができる。

また、海軍が構築した特攻艇秘匿壕としてヌーザランミ特攻艇秘匿壕群がある。本壕は、宮古島市内で唯一の史跡（戦争遺跡）の指定文化財でもある（指定文化財の名称は「海軍特攻艇格納秘匿壕」）。本壕を構築したのは、海軍313設営隊で、第41震洋隊（八木部隊）が配備されている。八木部隊は、約180名で構成されており、1945（昭和20）年2月29日に平良港へ入港している。

このように、宮古島の平良港から狩俣にかけての東海岸に特攻艇秘匿壕群が構築されたのは、敵の上陸予想地点として考えられていたためである。幸いなことに、宮古島市内において特攻艇が出撃することはなかったものの、平良港を中心とした激しい空襲があったことは、隊員の記録からもみてとることができる（中尾藤雄『従軍記録抜萃』など）。現在残されたこれらの特攻艇秘匿壕群は、太平洋戦時下における宮古島の状況を語る重要な戦争遺跡といえる。



写真7 I地点・駐屯地碑



写真8 I地点・壕5内部



写真9 Ⅲ地点壕・近景



写真10 Ⅲ地点・銃眼



写真11 Ⅲ地点・壕近景

第3章 報告① - 荷川取崎名原の古墓 -

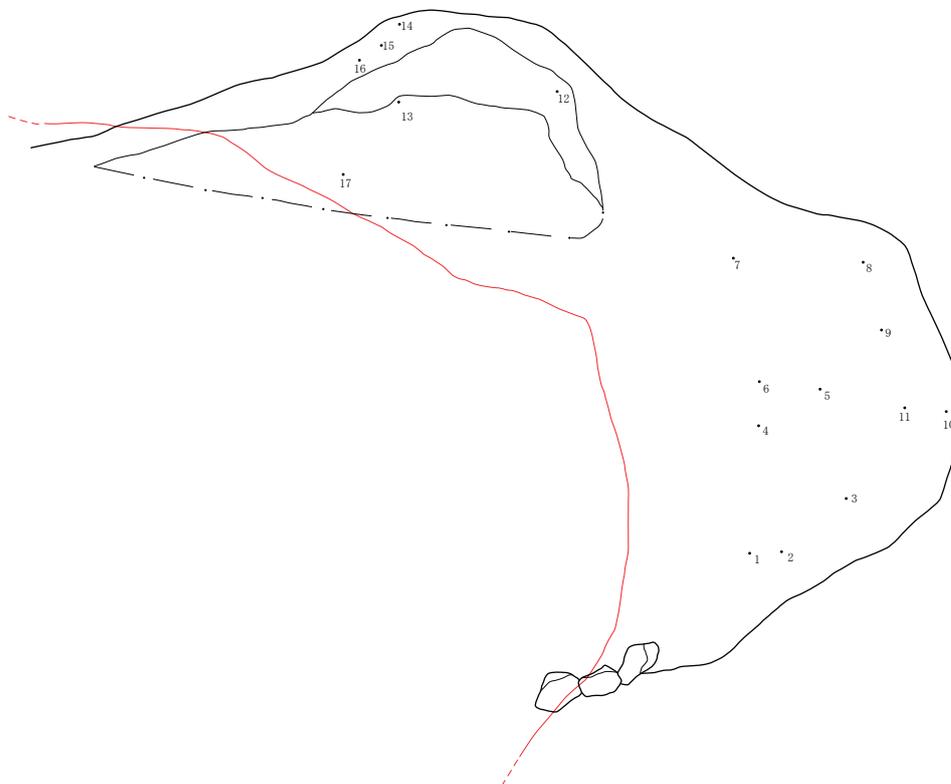
第1節 遺構

古墓は、自然の岩陰を利用しており、人為的に掘り込んだ痕は確認できなかった。岩陰部の天井部分の厚さは、1.4mほどと薄い。調査前の段階では、天井部分や周辺部からの2次堆積も厚くみられた。古墓の規模は、内部の幅が入口部分で約3.8m、高さは1.3mほどである。奥行きは、約2.2mを測ったが、人が入れないほどの空間がまだ、奥に続いている。

墓内部には、沖縄産無釉陶器の壺や浅鉢が多くみられ、タイ産の褐釉陶器も1点確認された。これらの遺物の中に人骨が納めれる状況は確認できなかったが、沖縄産無釉陶器の水甕の中には人骨が収骨されおさめられていた。人骨が収骨されていたのは、この水甕の1点のみである。表面で確認されていた遺物については、取り上げ番号を設けて取り上げを行った。(第7図) この遺物の分布状況をみると、墓の両壁面部にある程度まとまっているように見える。

墓内での人骨の出土状況としては、一定の場所に集められているという状況ではなく、全体的に人骨が出土しており、一次葬のように骨が出土する状況ではなかった。

後述する第2、3節のとおり、本古墓内からは、150点の遺物が出土している。遺物の主体は、沖縄産無釉陶器や施釉陶器、簪、キセルであり、概ね近世～近代に位置づけられるが、戦中のビール瓶や万年筆などといった後世の遺物も出土する。これらの遺物については、近接する特攻艇秘匿壕との関係性についても考えていく必要がある。



第7図 荷川取崎名原の古墓平面図 (S=1/40)

* 1 : 赤線は岩陰墓の上部のラインを示す。 * 2 : 数字は遺物の取り上げ番号を示す。

第2節 遺物

1. 白磁

白磁は、徳化窯の小杯が1点出土する。

2. 中国産褐釉陶器

壺と思われる胴部の耳が1点のみ出土する。

3. 沖縄産無釉陶器

(1) 壺 壺は、大きく2つの器形に分かれる。1つは、頸部に明瞭な稜線を有し、口縁部へむけてほぼ垂直に立ち上がり、口唇部がL字型をなす。最大径は、胴上部に位置する（図版3-1）。もう一つは、最大径が胴中央部あたりに位置し、なで肩の器形をなし、頸部から口縁部にむけてややラップ状に開く。頸部に沈線を廻らす（図版3-2）。前者は器高が15～20cm前後で、後者は27cmほどと前者に比べ大型である。出土点数としては、後者は1点のみで、残りは前者の器形をなす。

(2) 浅鉢 浅鉢は、器高が6～7cm程と低く、泥釉を施す。出土する浅鉢はほぼ、近似した規格を呈している。器形から浅鉢として器種を設定したが、近世～近代の墓から出土する傾向があり、その用途については不明である（図版3-4～7）。

(3) 水甕 1点のみが出土する（図版3-3）。口縁部はL字型をなし、頸部から付近に沈線を複数廻らす。本遺跡では、水甕内に人骨が納められており、蔵骨器へ転用されている。

(4) 急須 急須は1点出土する。蓋は確認されないが、比較的小型の急須である。

4. 沖縄産施釉陶器

(1) 碗 碗は、いわゆる灰釉碗と白化粧に透明釉を施す2つに細分される。

灰釉碗は、最少個体数として3点出土している。灰釉碗は、口径に比して器高が高く、内底の狭い器形（図版4-9）と、口径に比して器高が低く、内底の広い器形（図版4-10）に細分可能であるが、本遺跡では出土点数も少ないため、灰釉碗として一括して報告を行う。

白化粧の碗は、最少個体数として1点出土する（図版4-8）。外面に呉須と鉄釉で印花を施文する。

(2) 瓶 いわゆる嘉瓶と称される瓶が1点出土する（図版4-12）。飴釉を施す。

(3) 油壺 油壺は、2点出土しているが、いずれも口縁部を欠損するため、全体の器形を伺いしることができない。褐色の釉を施し、胴部が扁平な器形（図版4-11）のものと、飴釉を施し上げ底状の高台を呈するものが出土する。

(4) 酒器 酒器は1点のみ出土し、白化粧に透明釉を施し、呉須と鉄釉で施文される（図版4-13）。

(5) 急須〔蓋〕 飴釉を施した急須の蓋のみが1点出土する。

5. 土器

土器は、全体の器形を伺いしることのできる資料はないが、壺の口縁と、底部（図版4-14）が出土している。

6. タイ産陶磁器

タイ産陶磁器として、3つの横耳を付した完形の壺が1点出土する（図版4-15）。

7. 近世磁器

近世磁器は、小碗1点、小杯1点が完形で出土する。

8. 簪（図版6左上）

簪は、頭部の形態によって花型1点、耳かき型5点に分類した。茎部のみの破損品も1点出土する。

9. キセル

雁首は、青銅製4点、石製1点、土製1点が出土する。青銅製（図版5左下）は、首の部分が長く火皿がラップ型を呈すタイプと、首の部分が短く火皿が丸形を呈するものに大きく大別される。また、石製は、首の部分を設けない円柱型を呈す（図版5右下）。土製は、器面を面取りし磨き調整を行う（図版5中央右）。

吸口は青銅製3点、陶器製1点が出土する（図版5中央左）。青銅製は、接続部側が円柱型をなすタイプと、接続部が大きく、吸口部へ細く移行するタイプに大別される。

10. 石製品（図版5-上）

1点は細粒砂岩製で略円形を呈し（17）、もう1点は岩石種不明であるが枕型を呈する（16）。

11. ビン類

ビンは、完形が4点出土している。3点は濃緑色を呈し、2点は無文、1点は「SAN MIGUEL BREWERY」「MANILA. P. I」と記されている。もう1点はコカ・コーラ瓶である。

12. 貝類遺体（図版6下）

貝類遺体の出土状況は以下のとおりである。*完：完形、殻：殻頂部、破：破片を示す

ヒメイトマキボラ（破片1）、シャゴウガイ（完1）、チョウセンサザエ（完1、破1）、カワラガイ（殻1）、リュウキュウバカガイ（殻1、破1）、イソハマグリ（完1）、リュウキュウザル（完1）

13. 鉄製品（図版6右下、中央）

釘と判別される製品が6点。その他用途不明の製品が7点出土している

14. その他

その他の製品として万年筆が1点出土する。

第1表 出土遺物集計表

種類	器種	残存状況	点数
白磁	小杯	口縁部～底部	1
中国産褐釉陶器	壺	胴部(耳)	1
沖縄産無釉陶器	壺	完形	4
		口縁部～底部	1
		口縁部	1
	浅鉢	完形	4
	水甕	完形	1
	急須	完形	1
沖縄産施釉陶器	碗	完形	2
		口縁部～底部	2
		口縁部	3
	瓶	胴部～底部	1
	油壺	胴部～底部	2
	酒器	胴部～底部	1
	急須 [蓋]	完形	1
	不明	口縁部	1
		底部	1
		胴部(マンガン)	7
胴部		7	
近現代陶磁器	小碗	完形	1
	小杯	完形	1
土器	壺	口縁部	2
		底部	1
	不明	底部	5
		胴部	51
煙管	雁首	完形	6
	吸口	完形	4
簪	花型	完形	1
	耳かき型	完形	5
	茎部	破損	1
土製品	蓋	完形	1
石製品	-	-	2
ビン類	-	完形	4
鉄製品	-	-	13
貝類遺体	-	-	9
万年筆	-	-	1
総計			150

第2表 観察表

図版番号	取上No.	種類	器種	残存状況	観察事項
1	2	沖縄産無釉陶器	壺	口縁～底部	底径8.9cm。口縁部はL字型をなす。素地は赤褐色で、極わずかに3～4mmの石灰岩を含む。外底成形が粗く、凹凸がみられる。
2	3			完形	口径9.6cm。底径7.1cm。器高20.7cm。口縁部はL字型をなし、頸部に明瞭な稜線を有する。外面は暗オリーブで、器面の一部には膨張の痕がみられる。器面は僅かに成形の痕が残るものの、丁寧に仕上げられる。外底の調整は粗く凹凸が残る。素地は赤褐色を呈す。
3	10			完形	口径12.0cm。底径12.7cm。器高27.1cm。口唇部はL字型をなし、肩部に稜線を有し、2条の沈線を廻らす。最大径は胴中央部付近に位置する。器面は、灰オリーブ、暗オリーブ色を呈し、一部、自然釉が確認される。
4	1		浅鉢	完形	口径18.5cm。底径8.2cm。器高6.7cm。口唇部は平坦で外底は中央部がやや高くなる。内外面とも泥釉をかける。外面は成形の痕を良く残し、部分的に混入物の石灰岩礫は僅かに表れる。
5	4				口径18.5cm。底径7.9cm。器高7.2cm。口唇部は平坦を呈し、外面には成形の痕を残す。内外面とも泥釉をかけ、暗オリーブを呈し、部分的に素地が露胎する。
6	5				口径19.5cm。底径7.8cm。器高7.0cm。口唇部は平坦を呈し、外面には成形の痕を残す。内外面とも泥釉をかけ暗オリーブを呈す。部分的に素地が露胎し、赤褐色を呈す。3～4mmほどの石灰岩礫を混和剤として僅かに含む。
7	8				口径18.8cm。底径7.5cm。器高6.5cm。口唇部は平坦を呈し、外面は成形の痕を明瞭に残し、外底部も凹凸を残す。内外面とも泥釉を施し、暗オリーブを呈す。混和剤の石灰岩礫が部分的に器面に現れる。
8	6	沖縄産施釉陶器	碗	完形	口径13.3cm。底径6.0cm。器高6.4cm。白化粧に透明釉を施す。外面に、鉄釉と呉須を用いて印花文を3つ施文する。内定は蛇の目に釉剥ぎされ、畳付は露体する。素地はオリーブ色を呈し軟質。
9				完形	口径13.0cm。底径6.9cm。器高5.4cm。口径に比して器高が低く、内底が広い。フィガキによる施釉。釉は灰オリーブを呈し、底は灰白色。
10				完形	口径12.6cm。底径7.2cm。器高6.3cm。灰釉碗。フィガキによる施釉。釉は灰オリーブを呈し、素地は灰白色。外底は削り込みの痕が明瞭に残る。器面には混入物の礫が部分的にでる。
11		油壺	胴部～底部	完形	底径3.3cm。腰部まで胎釉を施釉し、腰部以下は露胎。外底は畳付を有せず、中央部へむけて上がる。素地は灰白色で、1mm以下の赤色粒子を僅かに含む。
12	7			完形	底径6.3cm。いわゆる嘉瓶。頸部以上を欠損するが、肩部はなで肩を呈し、胴部に14条の沈線を施す。高台脇まで胎釉を施し、高台部分は露胎。沈線部分は濃淡が濃くなる。外底は中央部が突出する。
13	16			完形	底径7.5cm。口縁部を欠損する。白化粧に透明釉を施す。頸部に2条の圈線を施し、肩部と腰部に同様の2条の圈線を廻らす。頸部と肩部の圈線の間には、印花文をほどこし、呉須を塗す。また、肩部と腰部の間をハの字状の2条の斜線で区画する。区画内には縦位の沈線を施す。縦位の線のは鉄釉と呉須を塗す。畳付の部分は白化粧のみで、釉剥ぎを行う。
14	9	タイ産褐釉陶器	壺	完形	口径13.3cm。底径14.4cm。器高26.8cm。口縁部は略L字型を呈し、口唇部は平坦を呈す。肩部に横耳を3つ付す。オリーブ黒の釉を施釉し、口唇部は釉剥ぎし、外底は露胎する。器面に3mmほどの白色鉱物があらわれる。
15	15	土器	壺?	底部	底径は計測不可。内側の底面付近は横位の指ナデが明瞭に残る。胎土は黄褐で、1mm以下の白色粒子と、1～2mmの赤褐色粒子を含む。壺と推察される。
17	17	石製品	-	-	細粒砂岩で、略円形に成形する。用途不明。
16			-	-	岩石の種類は不明。枕型の形状呈する。本来の自然面が残存するが、表面をうちかく加工も多くの範囲で見られる。



1



2



4



5



3



6



7

图版3 出土遺物1 (S ≍ 1/5)



11



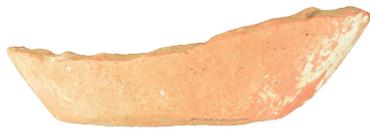
12



9

10

8



13

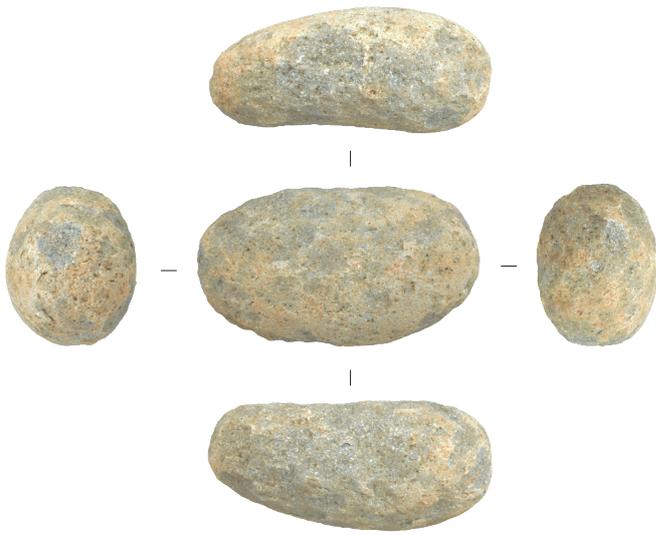


14



15

图版 4 出土遺物 2(S ≐ 1/4)



16

石製品 (S ≒ 1/5)



17



煙管・吸口 (S ≒ 1/3)



煙管・雁首〔土製〕 (S ≒ 1/3)



煙管・雁首〔青銅製〕 (S ≒ 1/3)



煙管・雁首〔石製〕 (S ≒ 1/3)

図版5 出土遺物3



簪 (S ≒ 1/3)



鉄製品〔釘〕 (S ≒ 1/3)



鉄製品 (S ≒ 1/3)



貝類遺体 (S ≒ 1/3)

1: ヒメイトマキボラ、2: チョウセンサザエ、3: イソハマグリ、4: リュウキュウザル、5: シャゴウ

図版 6 出土遺物 4

第3節 人骨分析

1. はじめに

荷川取崎名原古墓から出土した人骨について分析結果を報告する。

2. 調査の方法

人骨は洗浄作業を行った後、部位の同定および接合作業を行った。その後、接合された人骨片の残存状況を図化（添付資料台帳）、被葬者数（最小個体数）推定の基礎資料とした。すなわち、性別・年齢・左右を考慮しながら、同側・同一部位をカウントし、得られた最大数をもって推定最小個体数とした。

人骨鑑定の際に用いた年齢区分は Knussman(1988)1) を参考に、乳児（出生-1歳）、幼児（1-約6歳）、小児（約6-約14歳）、若年（約14-約20歳）、成年（約20-約40歳）、熟年（約40-約60歳）、老年（約60歳以上）とした。通常計測は Knussman(1988)1) に従った。分析結果を以下に示す。

3. 出土人骨の所見

3-1. 一括資料

人骨の保存状態は良好でほぼ全身の骨が検出されたが、破損が著しく部位ごとの残存率も断片的である。推定される被葬者数は成人7体（男性3・女性4）、未成人3体（幼児3）、合計10体である。未成人の割合は30%である。

成人の下肢骨に数例、骨膜炎が見られた。

歯列残存状況からみた年齢推定の結果は、4-5歳、20代前半、30代後半、熟年、老年が確認できた。

3-2. 厨子甕

人骨の保存状態は良好で全身骨が検出された。推定される被葬者数は成人3体（男性0・女性2・性別不明1）、未成人1体（幼児1）、合計4体である。未成人の占める割合が25%である。

成人女性（30代）はほぼ全身骨が検出された。橈骨には何らかの病変が見られた。

歯列残存状況からみた年齢推定の結果は、20代前半、30代が確認できた。

まとめ

荷川取崎名原古墓の発掘調査では、14体の被葬者数が確認できた。その構成は成人男性3体、成人女性6体、性別不明成人1体、未成人4体である。未成人の割合が全体の29%となっている。骨端部が良好な状態で残存している資料が無く、計測は実施できなかった。

部位別集計表及び推定被葬者数は第3～5表、被葬者構成グラフを第8図に示した。

参考文献

- 1) Knussman R. (1988) Martin / Knussman Anthropologie. Band 1, Stuttgart, Gustav Fischer Verlag.
- 2) Yamaguchi B. (1973) Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Bulletin of the National Science Museum, vol.16, pp.161-171.

第3表 荷川取崎名原古墓（一括）部位別集計表 / 推定被葬者数

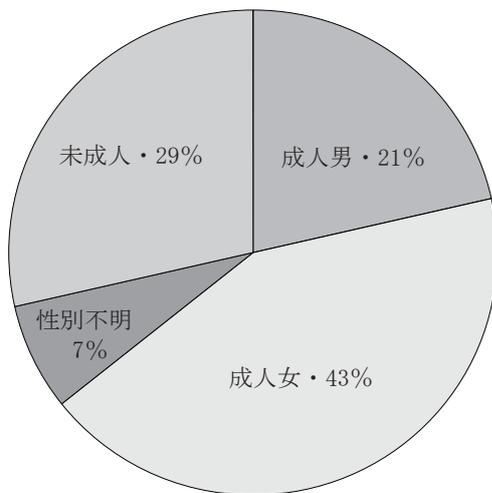
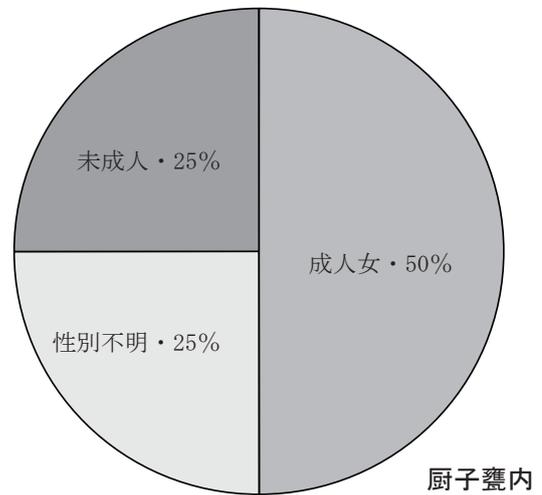
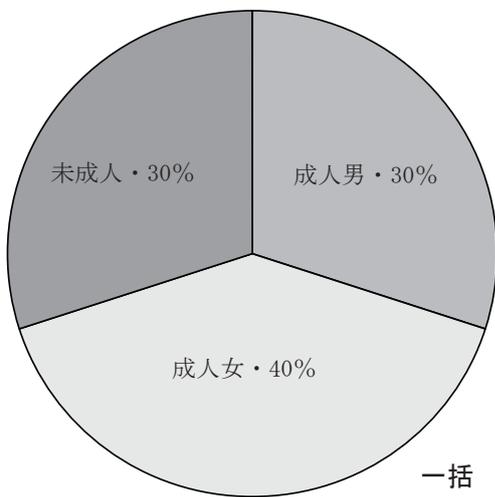
	成人				未成人					計	備考	
	男性	女性	不明	計	若年	小児	幼児	乳児	計			
側頭骨	右				0					0		
	左	3		3	6					0		
前頭骨	右			1	1					0		
	左			1	1					0		
下顎骨	右	2	2	2	6					0		
					0					0		
	左	1	2	3	6			1		1		
上腕骨	右	1	1		2					0		
	左	2			2					0		
尺骨	右	2	3		5			1		1		
	左	2	3		5					0		
橈骨	右	3			3			1		1		
	左	1	2		3			1		1		
寛骨	右			1	1					0		
	左	1	2		3					0		
大腿骨	右	2	3	2	7			3		3		
	左	2	4	1	7			1		1		
膝蓋骨	右				0					0		
	左				0					0		
脛骨	右		2		2					0		
	左	1	2		3					0		
腓骨	右	3	1		4					0		
	左		2	2	4			2		2		
距骨	右				0					0		
	左				0					0		
踵骨	右				0					0		
	左				0					0		
推定最小 個体数	3	4		7			3		3	10		

第4表 荷川取崎名原古墓（厨子甕内）部位別集計表 / 推定被葬者数

	成人				未成人					計	備考
	男性	女性	不明	計	若年	小児	幼児	乳児	計		
側頭骨	右			0					0		
	左		1	1	2				0		
前頭骨	右		1		1				0		
	左		1		1				0		
下顎骨	右		1	2	3				0		
	左		1	2	3				0		
上腕骨	右		2		2				0		
	左		1		1			1	1		
尺骨	右		1		1				0		
	左		1	1	2				0		
橈骨	右		2		2				0		
	左		1	1	2				0		
寛骨	右				0				0		
	左				0				0		
大腿骨	右		1		1				0		
	左		1		1			1	1		
膝蓋骨	右		2		2				0		
	左				0				0		
脛骨	右		1		1			1	1		
	左		1		1				0		
腓骨	右		1		1				0		
	左		1		1				0		
距骨	右		2		2				0		
	左		1		1				0		
踵骨	右		1		1				0		
	左		1		1				0		
推定最小 個体数		2	1	3			1		1	4	

第5表 荷川取崎名原古墓推定被葬者数

出土地	成人				未成人					計
	男性	女性	性別不明	計	若年	小児	幼児	乳児	計	
一括	3	4		7			3		3	10
厨子甕	0	2	1	3			1		1	4
計	3	6		10	0	0	4	0	4	14



成人男性	成人女性	性別不明成人	未成人	合計
3	6	1	4	14

第8図 荷川取崎名原古墓被葬者の構成



頭骨正面



下顎骨

図版 7 厨子甕内検出頭骨



正面

图版 8 厨子甕内檢出頭骨



写真 12 着手前（全景）



写真 13 着手前（墓内部）



写真 14 着手前（墓内部）



写真 15 発掘作業風景



写真 16 完掘状況（全景）



写真 17 完掘状況（墓内部）

第4章 報告② - 荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻秘匿壕群 -

第1節 壕1

1. 遺構

壕1は、小規模な石灰岩丘陵の縁端部を、横穴式に掘り込むようにして構築されている。壕口は、ほぼ南方向に開口し、入り口部分から僅かに北西方向に湾曲するようにのびる。全長は約14.0mである。壕口からはいつて約3mの部分で、左右に掘り込みを有する。東側部分は、約50cmほど上がっており、幅は約3.8m、奥行きは約3.2m、高さ約1.5mである。突き当たり部分は、さらに一段上がった形態をなす。西側部分は、幅が約2.0m、奥行き約1.6m、高さ1.8mである。2つの掘り込み部分はほぼ対象に位置する。

壕口から約7mの位置からは、柱を設置するための半円形の掘り込みが左右対称に5つ設けている。柱の半円形の掘り込みの直径は約40～50cmで、高さは約1.7mである。柱痕の側面の上端部分は、梁を設けるために、さらに円形の断面で掘り込みを行っている。今回の調査では、柱や梁を示すような木材は確認されなかったものの、後述する鋸の出土状況からも、本来は5対の柱と梁を設置していたことが推察される。

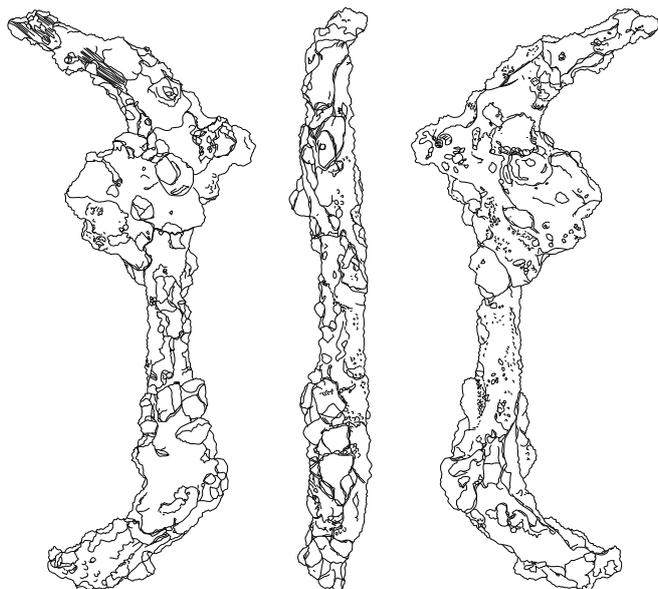
床面の状況を確認するために、壕内に左右の柱をかけるように小規模な試掘坑を設けた。基盤の石灰岩の直上にシルト質の土層が確認され、当時の床面と推察される。その上には戦後の産業廃棄物などを含む2次堆積層が厚く堆積する(第10図)。

2. 遺物

壕内より出土した遺物は、鋸1点のみである(第9図、図版9)。

鋸は、「二本の材木をつなぎとめるための両端の曲がった大釘」(大辞林第三版)である。

出土した鋸は、全体的に錆と石灰の付着が著しい。推定される規格としては、直線部分が約14cmで、両端の曲がった釘の部分は5.5～6cmを測る。両端部は、それぞれ直角よりハの字形に近い形態で僅かに広がっている。出土した鋸は、前述した壕の形態から、柱と梁の接合部分に使用したと推察される。



第9図 壕1出土遺物・鋸(S=2/5)



図版9 壕1出土遺物・鋸(S=2/5)

第2節 壕2

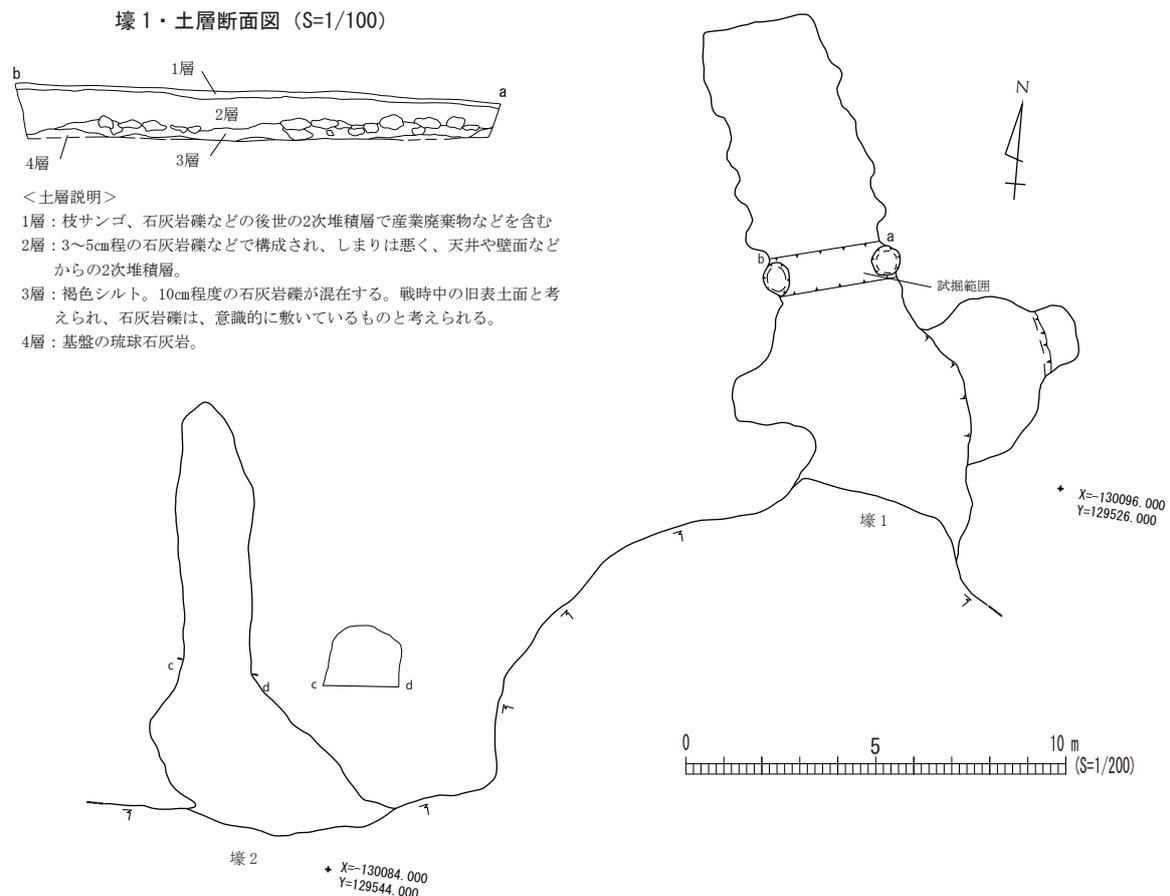
1. 遺構

壕2は、壕1より西側へ約18mの場所に位置する。壕口は、南方向に開口し、北西方向へ進んだ後、北側へ直進する。壕口の幅は4.2m、高さ2.0mと比較的広いが、北へ約7m直進する部分については、幅が1.6m、高さ1.5mと狭まった形態をなし、最奥部分の高さは1.2mと奥に行くに従い低くなる。北へ直進する部分の壕の断面形は、逆Uの字形を呈し、壕内部は、崩落による土砂の堆積も部分的にみられる。

第3節 まとめ

今回調査を行った、2基の壕は、周知の埋蔵文化財（戦争遺跡）「荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕」として報告されている（沖縄県立埋蔵文化財センター2005）。特攻艇秘匿壕とは、その名称の示すとおり、特攻艇を秘匿するための壕である。本壕の構築は、陸軍の海上挺身基地第4大隊が行い、海上挺身第4戦隊が配備されている。陸軍水上特攻艇「四式肉薄攻撃艇①」の秘匿を想定して構築されており、今回報告を行った別の壕には特攻艇が格納されている。

陸軍水上特攻艇「四式肉薄攻撃艇①」は、ベニヤ製で、幅1.8m、全長5.6mの規格を呈し、全速23～25ノット（42.5～46.3km/h）とされる。使用時には、250kg爆弾を船の後部へ設置していることから、全速よりもその速度は落ちることが推察される。



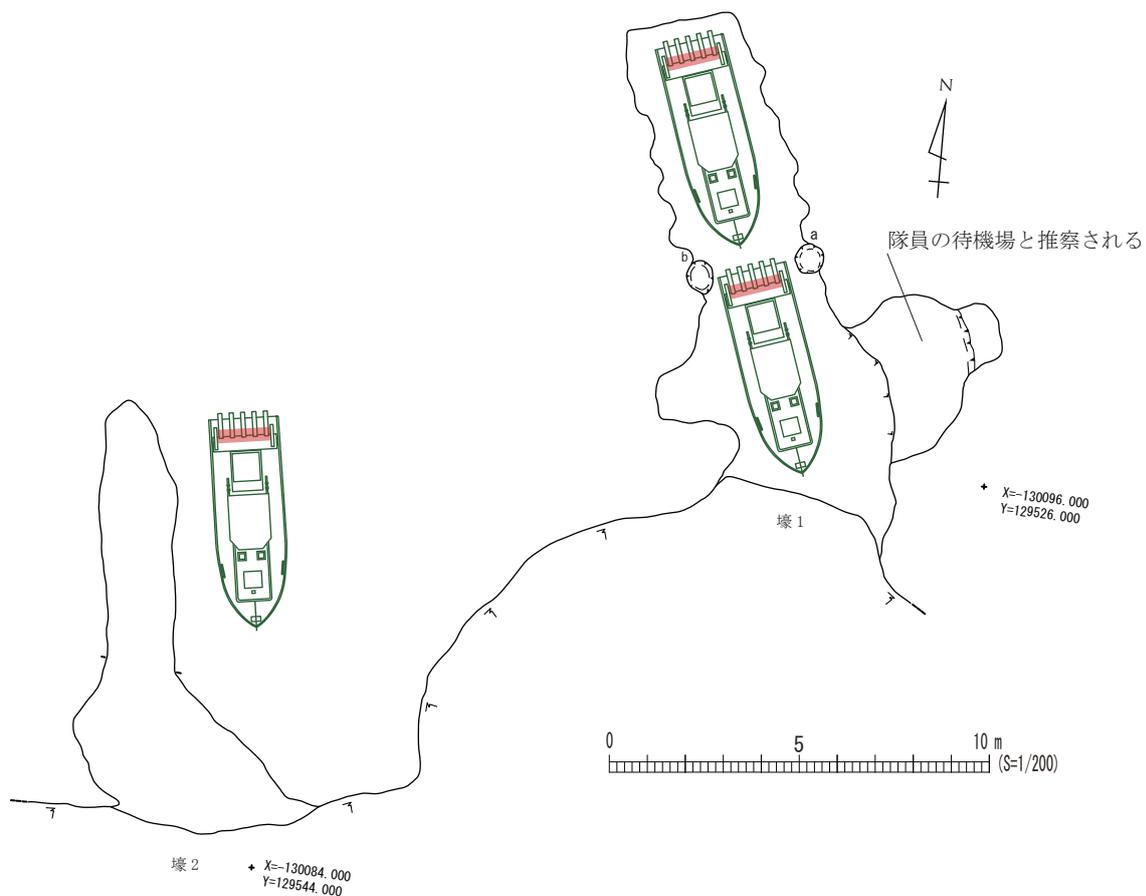
第10図 壕1・壕2平面図及び断面図 (S=1/200)、壕1土層断面図 (S=1/100)

この特攻艇の規格をもとに、壕1と壕2への格納を考えていきたい。壕1の壕内の幅は約3.0mと、特攻艇の幅よりも広く、柱を構築する直線部分の奥行きは約7.2mを有することから約1台の格納が可能である。壕全体の奥行きは、10.5mを測ることから最大で2台までは格納可能であるといえる。しかし、柱と梁を構築した範囲が、特攻艇1台分の格納スペースと等しいことを考えると、壕1内への特攻艇の格納は1台である可能性は高い。

陸軍の特攻艇の配備状況については、海上挺身第4戦隊の隊員である中尾藤雄氏による資料にその詳細が記されている（岡本）。その資料によると、特攻艇を海へ搬出するためのレールが壕内から海岸部へ敷かれ、特攻艇はトロッコに乗せられ出撃する。レールを設置するにあたっては、枕木が置かれている。そして、特攻艇へ乗り込む隊員は、秘匿壕内に脇部屋を設けて待機している状況が記されている。なお、資料の中では、隊員は、爆雷の入った木箱を並べて寝室としていたある。

この資料を参考にすると、壕1の壕口近くの東西の両壁面に設けられた掘り込みは、隊員の待機場であったことが推察される。特に東側部分は、一段高い場所に設けられ、最奥部には棚状の掘り込みもみられることから待機場として使用されたいた可能性が非常に高い。爆雷については、西側の掘り込み部分をその保管場所として使用していたことも考えられる。

また、試掘坑の土層断面では、石灰岩の礫を意識的に敷いている状況が確認されている。これは、枕木やレールを設置するにあたり石灰岩礫を敷いて整地したものと推察される。宮古島市内には、陸軍の特攻艇秘匿壕として、本遺跡の他に、大浜の特攻艇秘匿壕、トゥリバーの特攻艇秘匿壕が確認されている。



第11図 壕1・壕2における特攻艇配置推定図 (S=1/200)

この内、当時の遺構が残されているのは、大浜特攻艇秘匿壕の壕②のみである。壕の内部には、石灰岩の礫が2列並行に敷き詰められている(写真18)。この遺構を、中尾氏の資料に照らし合わせるなら、この2列の敷石にかかるように枕木がおかれ、その上にレールを設置した可能性が考えられる。今回の荷川取アップドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕の壕1は、このような2列並行の敷石は確認されていないが、礫を敷いて壕内を整地するという点では、類似した壕の構築方法を用いているといえる。



写真18 大浜の特攻艇秘匿壕・壕②の内部

以上のような壕1の形態的な特徴などから、壕1は特攻艇秘匿壕として構築されたと考えられる。

一方、壕2については、壕内の幅が約1.7～1.9mと特攻艇の幅よりも狭い部分があり、特攻艇を格納するには不十分であるといえる。しかしながら、北側へ直線的に伸びる形態は、特攻艇の格納も想定される。壕2は、壕1と比べ全体的に造りが粗いことから、構築途中であった可能性も考えられる。その他の可能性としては、特攻艇の船員以外の整備員などの待機場としての可能性も考えられる。いずれにしても、壕2の規格からは、特攻艇を格納したとは考えにくい。

以上、壕1、壕2の特攻艇秘匿壕としての機能について考察を行ってきた。これらの考察を通して、2基の壕が、特攻艇秘匿壕に関連しており、これまでの調査成果を補完することができたと考える。今回の調査によって、沖縄県立埋蔵文化財センターの分布調査でⅡの地区として確認されていた壕群は、前回の調査も併せて全て記録保存されたこととなる。本地区における特攻艇秘匿壕が構築されていた歴史的な事実は、荷川取海岸秘匿壕群・アップドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕はもちろんのこと、宮古島市内における旧日本陸軍の海上挺身基地の全体像を考える上でも重要な意味をもつといえる。

<参考資料>

- ・若潮会・戦史編纂委員会(編集主幹 儀同保) 1972年『①の戦史-陸軍水上特攻・船舶特幹の記録-』
- ・新井義満 『従軍体験記』 *新井義満は、陸軍海上挺進第4戦隊員
- ・中尾藤雄 『従軍記録抜萃』 *中尾藤雄氏は、陸軍海上挺身第4戦隊第1中隊第2戦闘群
- ・岡本恵昭『宮古島戦争資料(1)』
- ・岡本恵昭 1997年「資料紹介海上挺身隊員中尾メモの公開について」『平良市総合博物館紀要』第4号 平良市総合博物館
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター
- ・中尾藤雄 1998年「元陸軍海上挺身隊『中尾メモ』全文紹介-①特攻艇員の日記より-」『平良市総合博物館紀要』第5号 平良市総合博物館



写真 19 着手前



写真 20 壕 1 着手前



写真 21 壕 2 着手前



写真 22 調査終了後における近景



写真 23 壕 1・調査終了後の壕内部分



写真 24 壕 1・調査終了後の壕内部



写真 25 壕 1・柱跡と試掘調査状況



写真 26 壕 2・調査終了後の壕内部分



写真 27 壕 2・壕内部（壕内付近）



写真 28 壕 2・壕内部

報 告 書 抄 録

ふりがな	にかどりさきなばるのふるばか・にかどりかいがんひとくごうぐん・うぶどうまーりゃとっこうていひとくごうぐん							
書名	荷川取崎名原の古墓・荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリャ特攻艇秘匿壕群							
副書名	大米建設新工社建設工事に伴う発掘調査報告書							
巻次	－							
シリーズ名	宮古島市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	久貝弥嗣、山口直美、株式会社文化財サービス沖縄営業所							
編集機関	宮古島市教育委員会							
所在地	〒906－0103 沖縄県宮古島市城辺字福里600－1番地							
発行年月日	2017年12月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	調査原因
収録遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′ ″	° / ′ ″		m ²	
荷川取崎名原の古墓・荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリャ特攻艇秘匿壕群	沖縄県宮古島市平良字荷川取			24° 48′ 16″	125° 16′ 45″	2017年4月～12月	墓10m ² 、壕20m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
荷川取崎名原の古墓	古墓	近世～近代	岩陰墓		沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、タイ産褐釉陶器、人骨		古墓内からは、14体の人骨が埋葬されていた。周辺部からは、過去に複数の墓が確認されていることから、近世～近代にかけての墓域であったと考えられる	
荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリャ特攻艇秘匿壕群	戦争遺跡	太平洋戦争時（沖縄戦）	特攻艇秘匿壕2基		錠		本遺跡は、特攻艇秘匿壕である。2基の壕について調査を行い、1基の壕内には、柱は梁を設置していた痕跡が確認された。	

荷川取崎名原の古墓

荷川取海岸秘匿壕群・ウブドゥマーリヤ特攻艇秘匿壕群

－ 大米建設新工社建設工事に伴う発掘調査報告書 －

発行年：平成 29(2017)年 12 月

発行・編集：宮古島市教育委員会

〒 906-0103 沖縄県宮古島市城辺字福里 600-1

TEL：0980-77-4947 FAX：0980-77-4957

印刷：シモジ印刷
